



家から持参の容器は様々で、フライパンの子も  
いる給食タイム — ナブル、8月 —



2013年10月25日発行

NPO 法人ビラーンの医療と自立を支える会  
(英文名略称・HANDS)  
本部：〒227-0033 横浜市青葉区鴨志田町 516-11  
TEL & FAX:045-500-9151  
E-mail: hands-mindanao@nifty.com  
<http://homepage3.nifty.com/hands/>  
郵便振替口座 00210-5-72693  
(加入者名) ビラーンの医療と自立を支える会

## 貧困解消、少数民族の地位向上に”教育の力”

—チボリの里子経済現況から今後の支援を考える—

毎年「国際協力の日」の10月6日近くに行われるグローバルフェスタ JAPAN、今年は5、6日に開催されました。会場の日比谷公園には、約300団体が教育、医療、環境、収入向上などのエリアに分かれて出展、私達も収入向上エリアで参加しました。

各ブースを回って気づくのは、教育エリアでなくても、奨学金支援をしている団体が結構あることです。それぞれが取りくむ貧困、医療、人権侵害、環境破壊等の問題の背景にある低い識字率や人材不足問題に関わらざるをえないためかと思います。医療から始めた私達も、半年後には奨学金支援を始めました。

1961年にレイクセブ町に入り、サンタクルスミッション/SCMを設立したカトリック宣教団も、その貧困、先祖伝来の土地喪失問題の背景に、低い識字率があるとして早くから教育支援を始めました。それが、チボリ国際里親の会/JOFPA(初代会長故藤原氏)という強力なパートナーを得て、既刊会報で触れたように、人材を輩出し、地域の発展、貧困問題の改善に寄与しました。

同じSCMをパートナーとし、JOFPAの教育支援を引き継いだ私達としては、まずは、貧困の改善状況を確認するために里子報告に世帯別月収の記載を依頼しました。

職業と月収を一覧表にしてみますと、現地訪問の度に実感するレイクセブの発展が如実に見てとれます。

支援が入る前は、平地の畑や湖の養殖は入植者に占拠され、チボリ民族は山腹の焼き畑や零細漁業で糊口をしのいでいました。

今回の資料でも、農・漁業専業が50世帯(55%)と農漁民が多いことには変わりありませんが、州都コロナダールまで舗装されて大市場への出荷が可能となり、月収8,000ペソ(約18,000円)の農家もありました。

そのほか、会社員9名、公務員・教師8名、大工5名、乗合バイク運転手5名、簾職人5名等があり、母親は、ホテル、土産物店等の従業員9名、教師5名、テナラク織手5名、海外出稼ぎ3名等でした。

里子の世帯別月収の平均は、6,000ペソ(約14,000円)で、2000ペソ程度の零細農漁民20世帯を除くと、SCMSI小学校の校納金、月額200ペソ(ハイスクールは600ペソ)を払える家庭も出ていると考えられます。

里子の家庭の収入が増えて、1対1の学費援助というよりは学校運営への支援の意味合いが強まる中でも、精神的な里子と里親の関係は続き、子どもたちも、日本の里親の応援を励みとして頑張っています。

里子90名の限られた資料ながら、半世紀に及ぶ地域集中型教育支援を通じた、極度の貧困の解消を、数字で確認できたのは収穫でした。また、町の発展は、風光明媚な自然と豊かな伝統文化という有形無形の資源の存在が大きいです。これもそれを生かす人材の育成があればこそ改めて教育の力を感じました。

この里子の収入調査で、改めて判明したことは、私達の奨学金支援対象、約50名余りのビラーン民族やレイクセブ町以外のチボリ民族世帯との格差です。奨学生の親の年収は、チボリの里子世帯の月収並みと分かりました。辺境の村の貧困解消への道のりが遠いことを改めて思い知らされました。

民族教育を正課とし、質の高い教育を通じて、少数民族全体の地位向上、伝統文化継承の砦となっているSCM学校法人を、今後も精神的里親制度のもとで支えながら、里子以外の、あるいは公立に通う子どもの中にいる最貧家庭の子どもを支援する方法を、11月末の現地訪問では探ってきてきたいと思います。(山崎)